

2021年9月27日発行 価格100円

FPC Commentary Vol. 15

## オリンピックと「多様な」日本人

外交政策センター 副理事長 石澤靖治



●八村・大坂選手はパブリシティだったのか  
いろいろな意味で論争のあった「東京オリンピック・パラリンピック」が終了した。オリンピック終了後の調査では、64%の人から東京五輪が開催されて「よかったと思う」という回答が示された（読売新聞2021年8月7～9日調査結果）。つまり最終的には大会開催が国民からポジティブに受け止められたと判断していいだろう。その中で、本稿では「オリンピックと人種・国籍・国際化」について論じたい。

7月23日の開会式で日本選手団の騎手を米NBAで活躍する八村塁が務め、聖火の最終ランナーの役割をプロテニスプレーヤー、大坂なおみが担った。周知のように八村の父親は西アフリカの国ベナンの、大坂の父親は中米のハイチの出身者である。二人とも肌の色は黒い。日本は世界から、日本国籍をもつアフリカ系の人はいないと認識されていたことから、この2人の起用は国内外に大きな反響を呼んだ。これに対して「日本が多様性を重視していることをみせるだけのパブリシティにすぎない」という、いつもながらの皮肉めいた欧米の報道（英BBC、米ワシントンポストなど）もあった。

近年、世界で「多様性」という言葉がキーワードになる中で、日本も同様にその重要性を認識しているということ、2人の起用でアピールしようとしたことは確かだろう。だが、それを単なるパブリシティと考えるのは誤りである。この2人が日本の代表選手であったことは事実であり、具体的なデータは持ち合わせていないが、今回の日本代表にはどちらかの親が外国人である選手が、これまでになく多くみられたように思う。

そして実際に各種スポーツ分野で、これまで以上に多くの人種の選手が「日本人」として活躍するようになってきているし、それはオリンピックなど国際大会において、日本の競争力に貢献している。日本における人材の多様性は事実として進展しているのである。

一方、こんな光景を目にすることもあった。それはオリンピック最終日の男子マラソンのゴール直前で、3人の黒人ランナーが2位争いをする場面だった。オランダの選手がスタートするとともに、ベルギーの選手を手招きしてスタートさせ、結局この2人が銀、銅メダルに輝いた。これは美談とされたが、その理由は今回は別々の国の代表だったものの、実はともにアフリカのソマリア出身であり、経緯は異なるがともに難民としてそれぞれの国に落ち着いて栄誉を手にしたという事情があったからだった。

この2人には難民という厳しい現実があったが、それとは別にアフリカ出身者が積極的に別の国の国籍を取得して活躍するケースが目立つようになってきている。例えばケニヤやエチオピアなどのマラソン強国の選手の中には、代表争いの激しさから他の国からの五輪参加を望み、一方受け入れ国はメダル獲得による国威高揚のために多額の資金を提供したり生活を保障するなどして、選手を海外から呼び込むのである。それは20～30年ほど前からすでに起きていたことだが、近年はそれがさらに加速化しているようだ（日本からは、猫ひろしがカンボジア国籍を取得してリオデジャネイロ五輪のマラソン代表になり、アテネ五輪の体操団体総合で金メダルを獲得した塚原直也が、その後オーストラリアで国籍を獲得して同国からオリンピック出場を目指したことがある。ただこれらは多少前述の文脈からははずれる）。

オリンピックが盛り上がるのは、ナショナリズムが盛り上がる殺戮を伴わない「平和的な戦争」であるからだ。それによって国威発揚を図ろうとする国家にとっては、選手とはすなわち「兵士」ということになり、戦うための人材を世界から集めようとしていると表現したら言い過ぎだろうか。

### ●人材と競技の国際化の中で

いずれにしてもオリンピックは国家を世界に売り込む重要な「ビジネス」になり、その中で人材が流動化していることを意味する。そのオリンピックは世界共通の競争の場になるわけだから、いろいろな国の人が参入するために、試合やルールのありようも共通化されるようになることを意味する。そのことは、かつて国内的なスポーツであっても、五輪種目となり国際的なスポーツに昇格していく場合には、試合やルールのありようも変化していくことになる。

このように述べると、すぐに日本由来の柔道のことが連想されるだろう。今回のオリンピックの柔道で日本は、男女合わせて金9、銀2、銅1のメダルを獲得。金メダル9個はこれまでで最多の成績だった。1964年の東京五輪で採用されてその後急速に世界に広まった「柔道」は「judo」となり、ルールも競技のありようも変化した。そのことで日本柔道は一時期低迷した。また2000年のシドニー五輪の100キロ超級の決勝では、日本の絶対王者だった篠原信一が彼の高度な技を判断できない外国人審判の誤審によって銀メダルに泣いたことも印象深い。

その後、日本は世界の審判の講習を行ってレベルの向上と平準化を行う一方、選手自身も「judo」への積極的な対応を行った。

そうした中で競争力を取り戻したのが、2021年の東京五輪での成果だった。日本の柔道人口は約16万人。ブラジルの200万人、フランスの56万人と比べるとはるかに少ない。その意味からも国際化した「judo」で改めて力を示したことは多いに評価すべきであろう。なお、日本の金メダリストには父親が米国人のウルフ・アロン選手がおり、前回のリオ五輪では、やはり父親がアメリカ人のペイカー・茉秋選手が金メダルに輝いているという事実も、先に示した日本における人材のグローバル化の事例として明記しておくべきだろう。

一方、1988年ソウル五輪と1992年バルセロナ五輪において公開競技として実施され、2000年シドニー五輪から正式競技となった韓国発祥のテコンドーにおいては、今回、韓国がどの階級でも金メダルをとることができなかったことは象徴的である。

今回の東京五輪で様々な現象がみられた「多様性」の行方とグローバルな人材移動、競技の「国際化」の状況は、近年の国際情勢を反映している。多分それは今後もより大きく進展していくだろう。日本において、国家と国民は今後それを積極的な姿勢でとらえていくのだろうか。競技の国際化についてはそれほど大きな議論は起こらないだろうが、人材の部分では、ある一定の水準を超えた場合に日本社会でどれくらい許容されるのだろうか。スポーツは多くの国民にわかりやすい分野であり、オリンピックは人々の興味を引くだけに影響は大きい。この問いは、日本という国家のありようにとって、小さくない意味をもっている。

(文責：筆者)

発行：特定非営利活動法人 外交政策センター Foreign Policy Center (FPC)

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前2-30-7-502

定価：100円 Eメール：foreignpolicy617@gmail.com

ホームページ：http://www.foreign-policy-center.tokyo

Facebook：https://www.facebook.com/fpc.gaikoseisaku/